

# 観光の本義をめぐる最近の諸論調

——「観光とは何か」についての考察——

Opinions on the Concept of Tourism:  
An Overview of Theoretical Constructs Nowadays

大 橋 昭 一  
Ohashi, Shoichi

## ABSTRACT

There are many theoretical definitions and opinions as to what defines tourism. In this paper three noteworthy frameworks, “modernist — postmodernist”, “revolution by tourism” and “capitalist endeavour” are surveyed and it is argued that some concepts of postmodernism are very significant but so far removed from the capitalistic phenomena of everyday life, that they are viewed as unrealistic..

## I. 序—観光・ツーリズムの定義について

観光とはそもそも何か。社会経済上どのような意義をもつものであるのか。この問題について最近の国際的論調を手がかりに考察することが、本稿の課題である。ただし、わが国で観光とよばれるものは、一般には、英語では tourism にあたるとされており、本稿で対象にするものは、正確には tourism であることをお断りしておきたい。まず、語義的には、観光・ツーリズムは一般にどのように定義されているものであろうか。

わが国の観光は、中国の『易経』にある「観国之光，利用賓于王」を語源とするものといわれ、これで見ると、観光は「国の光を観ること」という意味になる。そこで、幕末・明治初期のころには観光は「国威を示す」という意味で

用いられていた。そのことは1855（安政2）年オランダより徳川幕府に寄贈された軍艦「スンピン」号に対し、幕府では「観光丸」と命名しているところによく示されている。

しかし、今日一般には、観光はこのような意味で用いられてはいない。観光は何よりも自然の風物や名所、旧跡等を訪ねる行為であり、気晴らしや保養を目的にしたものである。観光地への旅行にしても、仕事上のものは含まれない。こうした特徴をまとめて定義すると、観光は「人々が風物や名所を訪問したり、気晴らしや保養のために定住的場所を一時的に離れて行う自由時間における消費活動である」（w,129頁）といえる。

これに対して、英語のツーリズムは本来「廻るもの」という意味の言葉であるが、ツーリズムの定義は必ずしも一義的ではない。例えば、2000年刊行の“*Encyclopedia of Tourism*”に寄せた論考で、レイパー（Leiper,N.）は、正確にはツーリストについてであるが、一般に認められる意味づけや定義はないとしたうえで、統計上の概念規定は別にして、ツーリズムとしては余暇（leisure）に関連したものであることと、観光地への旅行計画があること、すなわち、ある程度の旅行道程があり、目的地において日帰り客とは異なる滞在期間のあることが最低要件であるといっている（h,pp.589-591）。

これに対して、ゲルドナー（Goeldner,C.R.）/リッチー（Ritchie,J.R.B.）は、2006年の書において、ツーリズムについて世界観光機関（UNWTO）の1993年の定義を可とし、ツーリズム理論の出発点にしているが（e,p.7）、それによると、ツーリズムは「自らの居住環境とは異なる場所に旅行し、レジャー目的、ビジネス（business）目的ないしは他の特定の目的をもって、その場所において続いて滞在するものであるが、それが1年以内のものをいう」となっていて、仕事上のものなども含む一方、滞在という点に比較的重点のあるものとなっている。

一方、バハール（Bahar,O.）/コザク（Kozak,M.）は2008年の書で、ヘブライ（語）では、もともとツーリズムは学びなどのために他の土地へ赴くことを意味した言葉だったことを指摘したうえで、20世紀初頭のころから今日的な意味のも

のとなってきたとし、現時点ではツーリズムは「ツーリストが気晴らし・娯楽・文化に関連した欲求を満たすために定住の場所以外において消費者として行う旅行 (travel) と宿泊 (accommodation) の事象」と規定されるものとしている (b,p.29)。

この定義では、仕事上のものなどは除外されているが、勉学のための旅行などは含まれるかどうか不確定のところがある。宿泊 (施設) をともなうことが必須なものとなわざわざ注記されているところからみると、滞在が重要要因とされ、UNWTO の前記定義と同様なニュアンスのものとみることができる。

現在でもツーリズムがきわめて盛んなドイツ (語圏) の場合でみると、この特徴はさらに顕著である。ドイツ (語圏) では、観光・ツーリズムにあたる言葉は本来 *Fremdenverkehr* であった (この点について詳しくは参考文献 x, y をみられたい)。これは「他の所や人 (*Fremde*) と交わること (*Verkehr*)」という意味の強い言葉で、そのため遍歴 (*Wanderung*) することなどが重視される見解がある一方、ポザー (Poser,H.: 参考文献 o) に代表されるように、*Fremdenverkehr* は他の所の人・物・風物等と交わることで、旅行 (*Reiseverkehr*) も *Fremdenverkehr* には含まれないという見解があった。

これらをふまえて、1965 年フンチカー (Hunziker,H.) は、*Fremdenverkehr* とは「その土地に異質の者 (*Ortsfremde*) の旅行と滞在から生じる関係と事象の総体をいうが、ただしその滞在は定住にならないものであり、従って所得獲得活動 (*Erwerbstätigkeit*) には結びつかないもの」(g,S.154) と定義しており、これが一般的定義として知られてきた。

しかし、ドイツ (語圏) でも、第 2 次世界大戦後英語文化の浸透が激しく、今日では *Fremdenverkehr* に代わって、英語の *tourism* にあたる *Tourismus* がほぼ全面的に使用されるものとなっている。*Tourismus* が使用されるようになったのは特に 1970 年代以降で、1967 年の国連指定の国際観光年 (英語で *International Tourist Year*) が、ドイツ語では *Jahr des Welttourismus* と表記されたことが大きなきっかけとなっている (n,S.11)。

以上の定義をみると、少なくとも英語でいうツーリズムにおいては、風物、

名所、旧跡など国の光を訪れるという観点は希薄で、それよりも、「見て廻る」「遍歴する」ものであるとしても、旅行先でとにかく滞在するものというニュアンスが強い。この点は、滞在という観点が希薄なわが国の観光概念とくらべると、ツーリズム概念の特徴の1つである。

これは、統計上などにおいて、観光客等についてもある国の滞在が24時間以上の者をツーリストとし、それ以下の者を日帰り客 (daily visitor) とする場合があることにも関係しているが (b,p.31)、日帰り客をツーリストとはしない考え方は、かなり一般的であるとみられる (cf.w,128 頁)。

また、ツーリズムの定義に関連しては、「定住とならないもの」である点を別として、ある旅行行為がツーリズムに入るかどうかについて、「訪問地での所得獲得のないもの」という要因以外でこれを行うことは、統計上などでは実際上不可能であることが考慮されなくてはならない。例えば、訪問地での所得獲得のない (仕事上のものを含む) 出張や会議出席のもの、勉学・講習受講目的のもの、巡礼目的のもの、縁者・知人訪問目的のものなどを、レジャー目的のものと区別することは実際上困難である。

こうしたツーリズムという言葉に関連した事情は、当然ながら、欧米のツーリズム論の根底にある。本稿は、こうした点もふまえて、ツーリズムのいわば本質をどのようにとらえるかについて、現在、国際的に注目されているいくつかの見解を取り上げ、その特徴的諸点を明らかにするものである。

まず、現在のツーリズム論では世界的に代表的な論者といっているアーリ (Urry,J.) の所論 (参照文献 s) を取り上げる。それは結論を先にしていこうと、ツーリズムは、自然風景など観光資源について「見る目」 (gaze) が、ツーリストと地元住民では異なることにより成立することを主柱とするものであり、ツーリストの移動に重点があるものともいえる。

なお、参照文献は末尾に一括して掲載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

## Ⅱ．「ツーリズム＝見る目の違い」論

### 1. ツーリズムの基本命題

アリーのツーリズム論の要点は次の点にある（s,pp.1-2,12）。ツーリストは、日常的に接したり見聞したり体験できないものを求めて旅行する。ツーリストがツーリズム先で求めるもの（観光資源等）は、地元住民にとってはごく日常的にあるものであるため、特別に価値があるものではないが、しかし、他の所の住民、端的にはツーリストにとっては、そこまで出向いて見聞したり体験したりする価値があるものである。というのは、地元住民とツーリストとではその物に対する「見る目」が異なるからである。地元住民の「見る目」にはその物は日常的なものであるが故に特別な価値がないが、ツーリストの「見る目」では非日常的なものであるが故に価値がある。「見る目」の違いから観光は生まれるが、「見る目」の違いは日常性の違いから生じる。

観光資源は、土地に密着したもの（spatial fixity）であることが大きな特徴で、可動性がない。これに対して、通常の物品は可動性があるから、売買にあたり物品を消費者の所にもってこることができるが、観光（資源）ではそれができない。従って消費者（ツーリスト）において観光（地）へ行くことが必要になる。こうしてツーリズムは成立する。

この「見る目」の違いによる観光の成立は、基本的には、社会的に行われるものである。実際のツーリストの行動では個人的行動もあるが、観光資源として通用するかどうかは社会的レベルの問題であり、個人的好みの問題ではない。ここに個人的旅行などとの違いがある。

このようなものとしてツーリズムの目的（観光資源）となるものには、大別して次のものがある。第1は文化的あるいは自然景観的に突出した価値があるものである。例えば世界遺産となっているようなものである。第2はそうした突出した価値はなくとも、名所、旧跡、庭園、農場、工場等で日常的な価値を越えるようなものや、他の国や地域の文物、風俗、行事のように日常的には接

しえないものである。第3は過去の遺物等を保管している博物館、名画等を保持している美術館、その他非日常的な物の展示場などがある。

この場合、ツーリズムの一般的規定としてアーリは次の諸点を挙げている(s,pp.2-3: アーリは9点としているが筆者で7点にまとめたもの)。

- ①ツーリズムは余暇活動であるが、日常的な家庭生活・労働生活とは別の場所への移動により生じ、かつその土地でなんらかの時間の滞在を含んだものである。ただし、移動および滞在は一時的なもので、永住を予定しないものである。
- ②こうした余暇活動としてのツーリズムはモダン社会で一般的になったもので、対極には労働のあることを前提としたものである。その労働は、個人的なもの、自由業的なものではなく、何よりも組織的規律のあるものである。今日の余暇活動としてのツーリズムは、こうした労働と対(つい)をなすものであって、ツーリズムも特定の時期と場所においておこらざるをえないものである。従ってツーリズムの目的(滞在)地は、日常的な労働と直接的関連のないもので、なんらかの程度においてそれと対照的な所であることが多い。
- ③それ故、今日のツーリズムは多くの人が参加する社会的レベルのものとなっており、必然的にマスツーリズムの性格を持たざるをえないものである。
- ④「見る目」(観光地)は、ツーリストにとって楽しみの状況や規模が日常的に経験しているものと異なるが故に選ばれるが、その期待は関係図書、宣伝パンフレット、テレビなどのメディアによって形成されるものである。
- ⑤こうしたこともあり、ツーリストの目当てになるものは、ツーリストが日常的に接したり体験できないものであるが、それらはビジュアル性においても日常的なものより勝るものであり、かつ他の場所よりも優れたものであることが多い。
- ⑥ツーリストの観光地についての「見る目」は、往々にしてその土地の象徴的なもの、つまりサイン(sign)によって形成される。象徴・サインは、例え

ばイギリスではパブ、アメリカでは高速道路網のようなものであることもある。

⑦ツーリストの「見る目」、すなわち観光地の魅力度は観光資源同士の競合の度合いと、ツーリストの好みの違いによっても影響をうける。

以上の命題は、1990年に提示されて以来変わるところがないが、2002年の第2版において以下の諸点で強調、修正あるいは補足がなされている。

## 2. 補強的コメント

まず第1に、移動性 (mobility: 上記の①) に関して、時間と空間の双方において圧縮化 (time-space compression) が進み、世界の流動化 (liquid-modernity) が進展したことが強調されるものとなっている。社会の移動性の進展は、かねてからアーリの強調するところであったが、ツーリズムでは観光資源などの土地密着性が必須的な条件になると考えられていた (s.p.38)。それが移動性の進展 (移動の迅速化・容易化) により、空間についても実質的近接化がおきているという主張になっている。

この結果、ツーリズムがさらに進展して、人々の活動・関心の中心がツーリズムにおかれるものとなった。「ツーリズムは、これまでの経済活動の順位では、最下位であったが、流動的モダン社会の勃興とともに最高とっていい地位を占めるものとなっている」 (s.p.142)。しかも、これまではツーリズムと無縁と考えられていた要素や分野までもツーリズムに取り入れられるものがあり、ツーリズムのハイブリッド化がおきている (s.p.144)。これをアーリはツーリズムの本格化とし、「ツーリスト再帰化」 (tourist reflexivity) とよんでいる。

再帰化とは、もともとアーリなどのいう組織された資本主義から組織揺らぎの資本主義 (disorganized capitalism) への移行にともなって、再帰的近代化 (reflexive modernity) が進展し、人間の組織離れ・個人化・自立化が進むことをいうものであるが (詳しくは参考文献 v), アーリは今やそれがツーリズムにまで及び、ツーリズムにおける個人化・自立化が進み、ツーリズムは人間生活上不可欠なもの

になっているというのである。

第2に、以上の移動性の強調とあいまって、ツーリズムにおける（移動性を中心にした）身体的動作の問題（corporeality, embodying）が詳しく論じられるものとなっている（s,pp.152-156）。これは、例えば高齢者ツーリズム等では大きな問題であるばかりか、そもそも身体を動かすことが絶対的な前提であるツーリズムでは、避けて通ることができないものである。アーリのもともとの所説では、この点の分析が不十分であったため、それは静態的あるいは受動的な分析にとどまっているという批判があった（s,pp.145,153）。

こうした批判そのものに対しては、アーリは、その所論がもともと「見る目」の体系的な分析・考究を意図したものであって、その限りでは対象外のものであると反論するとともに、しかしツーリストそのものの検討では重要な事柄であるとして、ツーリズムは何よりも身体を動かすものであること、そのために他の人間とも身体的接触関係がおき、それが重要な問題となりうること、何よりもツーリズムはツーリストが自分の身体を観光地におき、直接体験したり経験するものであること（co-presence）、ただし、ツーリズムにおける動作は、日常的な家庭生活上・労働生活上のそれとは別のものであって、動作のうえでの日常性からの脱却、非日常的動作の実践を意味するものであることなどを指摘している。

以上は、身体的動作でもツーリスト側の分析であるが、ツーリズム提供者側の問題もある。そこでは、移動してくる者に対応する者が必要で、それらの者は非移動性（immobility）という特徴をもたざるをえない（s,p.160）。その意味では移動性は非移動性を前提にすることを、アーリは強調する。アーリの所論は、移動性を強調するものであるが、移動性の無条件の一般論ではない。

第3に、「見る目」についてもビジュアル化のウエイトが高いものとして、それが強調されるものとなっている。ビジュアル化はもともとツーリストの「見る目」の当然の構成要素で特別に強調される必要がないものであった。それどころか、ビジュアル化に関連したツーリストの「本物・実物志向」（authenticity）



については（詳しくは後述）、アーリはそれを現代ツーリズムの土台と考えるのは誤りであるとし、それよりもツーリストと地元住民の日常性の違い、それから生まれる「見る目」の違いの方が、ツーリズム成立上重要な要因であるという見解であった（s.p.12）。

これに対してビジュアル化が、今や、前面におかれるものとなっている。例えば、19世紀後半、端的には1840年代以降のトーマス・クックによる集団ツーリズムに代表されるツーリズムの進展は、鉄道業等のインフラ整備により実現されたものであると同時に、アルプスなど山岳・森林の整備による風景の美的化が進み、風景ツーリズム（scenic tourism）が盛んになったことも要因の1つであることが詳しく記述されるものとなっている（s.pp.146-149）。もっともこの点も、アーリらにとっては、前記の再帰的近代化の進展による美的再帰化（aesthetic reflexivity）が進み、人間の美的観追求性が開花したと位置づけられるものである。

第4に、アーリのツーリズム論の根本命題である「見る目」そのものについても、いくつかの点で強調もしくは補足が行われている。実はこの点についてもともとアーリは、ツーリストでは、個人的な環境にいたい場合（一人でいたいような場合）と、集団・グループ的にいたいような場合があることを区別していた。前者は「ロマンティックな見る目」（romantic gaze）といわれるもので、静かに孤独でいたいような場合である。後者は「集団的な見る目」（collective gaze）で、お祭りや行事のときなどのように多くの人がいて、かえって納得できるような、多くの人がいることを必要とする場合である（s.pp.43,150）。

アーリの所説では、「見る目」にもこうしたレベルのものがあることが前提とされていたため、「見る目」についてこうしたものもあるならば、そうしたレベルの「見る目」としてはアーリの挙げた前記2種類以外にいくつかのものがあることが、他の論者から指摘されてきており、2002年の第2版でアーリ自身がそのいくつかを紹介している。

その第1は「スペクトルな見る目」（spectatorial gaze）で、車や列車の窓から

風景を見るような場合である。第2は「敬虔な気持ちでいるときの見る目」(reverential gaze)で、寺院や教会など神聖な場所にいるような場合である。第3は「人類学的立場にいたときの見る目」(anthropological gaze)で、訪問場所を詳しく精査したり学習しようとするような場合である。これと類似なものに「環境配慮的な見る目」(environmental gaze)がある。さらにメディアで仲介され伝えられるような「メディア化された見る目」(mediatised gaze)もある。

しかし、これらの追加的な「見る目」に対して、アーリは、それらはアーリのいう「見る目」とは別種のもの(other senses)であると評している。というのは、アーリのいう「見る目」は「見る者」の立場からのものであるが、これらのものは必ずしもそうではないからである。

こうした点からみると、アーリがとにかく「見る目」とよんでいるものには、少なくともレベルの異なる2種類のものがあると解される。すなわち、そもそもツーリズムを成立させるところの、ツーリストと地元住民とでは「見る目」が違うというレベルのものと、そうしたうえにたって個々のツーリズムの場面などで個々のツーリストあるいはツーリスト集団がもつ「見る目」の違いというレベルのものとのである。もとよりこの両者を統合して「見る目」とよばれる場合もある。例えばアーリは、最近のグローバル化の進展にともなって、ツーリストの「見る目」の再構成(reconfiguration)がおき、これまでの多かれ少なかれ単一的な「見る目」から、複数的な「見る目」(multiple gaze)への移行がおきているとしているが(s,pp.160-161),この場合などでは一般的なレベルの「見る目」の違いと個々のケースの「見る目」の違いが統合的に論じられている。

今日のツーリズムの基本的性格をどうとらえるかに関連して、総括的にアーリの所論をみると、アーリは基本的には、移動性、従ってツーリズムが今日における人間生活の根本をなすものであり、ツーリズムと日常生活との根本的区別がなくなっている、少なくともなくなりつつあるというポストモダンの考え方にたつものであり、ツーリズムにおけるポストモダン論の主張者の一人と位置づけられるが、しかしそうした現在社会の移動性・流動性を強調しすぎて、

現在社会をモータルだともするような見解には必ずしも賛成ではない。一部論者のような「大衆的かつ複合的な秩序喪失 (disordering)」は一時的なものであり、状況いかなのものである (contingent and temporary) というのが、アーリの結びの言葉である (s.p.161)。

アーリの所論のうち、本稿の課題に関連する特徴的諸点の要点は以上であり、一般にもポストモダン論的ツーリズム論の代表と目されるものであるが (t.p.203)、これに対して、ポストモダンを視野に入れながらも、モダン時代のツーリズム論としてそれを展開している代表的論者の一人にマッカネル (MacCannel, D.) がある。先進国の場合、ツーリズムによる社会革命によってモダンからポストモダンへの移行は可能というのが、その特徴的主張の骨子である。

### Ⅲ．先進国における「ツーリズム革命」論

#### 1. ツーリズム革命論の提起

マッカネルは、社会の規定から始める。社会は、一言でいうと、構造的多様体 (structural differentiation) と規定される (k.p.11)。それは、旧来の例えば資本主義といった規定とは異なるものであるが、構造的と多様体という契機のなかでも多様体に重点があり、社会は構造あるいは制度もしくはシステムではあるが、何よりも多様な構成要素から成るものであることが強調される。こうした構成要素には、例えば、社会的な階級や階層、ライフスタイルの異なるもの、人種の民族的集団、性別の違い、年齢別の違い、政治集団的なもの、専門家集団的なもの、過去を代表するものと現在を代表するものなどがある。

この場合、社会はこれらの諸構成要素の間でたえず変化がおきるばかりではなく、諸構成要素自体のなかでも絶えず変化がおきている流動の状態にある。この意味では、社会はシステム変数体 (systemic variable) と規定され、歴史的変化がある。歴史的変化において社会の基本的なあり方を変えるような変化を、マッカネルは革命とよぶ。

ツーリズムに関連する近世でみると、社会は、産業的社会 (industrial society) からポスト産業的モダニティ社会 (postindustrial modernity) に移行してきた。これはモダニティ革命といっていいもので、現在はこの革命の完成・仕上げの時期にあり、次の時代への過度期、つまり革命がおきる時期にある。その革命の形には、旧来のような革命もあるが、ツーリズムも有力な革命の形である、というのがマッカネルの主張である。

こうしたマッカネルの社会観・歴史観で特徴的なことは、社会構造、その変化において文化の役割を重視しているところにある。特にモダンの時代では文化の果たす役割は大きいとして、社会を何よりも「社会文化的な多様体」(socio-cultural differentiation) と特徴づけ、革命も、端的には、この社会文化的多様体の変革とする。ここで文化とは、広い意味のもので、ある集団の一般的な生活様式をいうものであり (例えばある組織についての組織文化をいうような場合)、マッカネルは「ものの考え方」(world view) とよんでいる (k.p.30)。

これらのことは、何よりも社会を「社会文化的な多様体」とみるところからくるが、文化史観あるいは文化的世界観といっていいものである。しかもこの場合、少なくとも現在では文化のあり様を決めるものは、余暇活動であり、なかでもツーリズムや名所見物 (sight-seeing) であるとしており、ここにマッカネルの主張の大きな特徴がある。それは、いわばレジャー世界観、ツーリズム世界観といってもいいものである。

ただし、マッカネルがこうした考え方をもって主張せんとすることは、今日の実際の社会活動ではレジャーやツーリズムが全面的優位のものになっているということではなくて、レジャー・ツーリズムの観点から社会全体、従って社会活動がとらえられるような時代になっているということである。

今日では、ツーリズムが社会活動の中心的契機になることの意味について、マッカネルは次のようにいっている。ツーリズムはモダン社会全体を越えようとするある種の集団的な努力である。モダニティが進行すると社会では個別化、破片化が進むが、それらを統合して1つの経験として組み立てるものの1

つが、ツーリズムである。今日、ツーリズムは国際化しているが、この世界的多様性を1つの単独な考え方 (a single ideology) にまとめるものは、ツーリズムだけである。というのは、ツーリズム・アトラクションにはモダン社会の多様性が写し出されているからである。

この点は、仕事 (work) と余暇との関連をどのように考えるかの問題と直結している。マッカンネルは、産業的社会からモダン社会への移行においてこの両者の関係に根本的な変化がおきた、というよりは、この変化こそ産業社会からモダン社会への移行を意味するものであったとみるのである。産業社会では社会の土台をなしてきたものは、仕事、広い意味での生産であった。当時では、社会の最も重要な価値は仕事におかれ、人々と社会とを結び付けるものは仕事であった。

しかし、モダン社会への移行とともにそれが変わった。マッカンネルの言葉によれば、「社会組織について実験的な試みをすることは、もはや工場やオフィスからは生まれない。新しい試みや形はむしろ、広い意味でのレジャー活動の枠組みのなかから起きている。これまでは社会的な関係やステイタス、つまり社会的および家庭的な活動において土台をなしてきたのは、職業 (occupation) のいかんであったが、今やそれは背景に退き、職業のいかんよりも、仕事と余暇とをどのように結び付けているかという生活スタイルのいかんが、その代わりになっている」(k,p.6)。

マッカンネルによると、これは何よりも、産業社会において仕事の現場 (工場やオフィス) で合理化が推進され、仕事の現場において脱文化化 (deculturization) が進行したためである (k,p.35)。かれは、ここにおいて機械化と組合化 (unionization) が進み、個人としての人間喪失がおきたとし、それを文化の喪失とよんでいる。これに対して、モダンの時代は文化復権、人間復権が進む時代であり、それは余暇活動の復権によって可能になった。

こうした余暇復権は、マッカンネルによると、先進国の場合概ね 1960 年代に始まっている (k,p.5)。それはツーリズム、端的にはマスツーリズムの発展の

時期である。ちなみに、1967年は国連指定の国際観光年であった。こうしたツーリズムの発展は、社会に革命をもたらす。

この革命は、例えば、ツーリストにより見聞されたりする現場（観光地への交通手段等を含む）では、このことを意識して、ツーリストに好感をもたれるよう改善・改革・変革がおきる形で進む。それまで埋もれていた古いもので脚光を浴びるものがある一方、今まででもはやされていたもので失墜するものもある。ツーリストに接する人々の態度や言動も変わったりする。つまり、ツーリズムの観点から社会が評価され見直されたりする。これをマッカネルは革命とよぶのである。

本稿では、それを「ツーリズム革命論」といつている。革命といってもこれまでも「経営者革命」とか「IT革命」といったものがあつた。しかし、このツーリズム革命の性格について、マッカネルは、社会全体の変革に及ぶものと位置づけている。「現代社会では政治、倫理、科学、芸術、余暇などの主要部門がすべて、この革命と歩調をあわせて進むようになっている」(k, pp.12-13)と述べ、社会の1つの局面や部面の変化ではなくて、社会文化的多様体としての社会全体に及ぶ革命であり、通常概念でいう社会革命であると位置づけている。

ただし、そのうえで、一方では「この（ツーリズムによる）革命では、資本主義廃絶も経済的調整（economic adjustment）の道半ばのものに過ぎない」（k, p.12）と述べるとともに、他方では、こうした革命的意識は今日すでに作用を起こしているわけでは必ずしもなく、革命が成就すると決まっているわけでもないとは断っている。

現在においては、社会的活動、従つて社会のあり方はツーリストの立場においてのみとらえることができるという主張は、マッカネルでは、ツーリズムの意義がツーリストの経験（experience）に求められていることとも関連している。このことは、さしあたりは、前節で取り上げたアーリがツーリズムの意義を「見る目」に求めていることとくらべると、問題意識で違いがあることを感じさせるものである。マッカネルの場合、このことは前述の仕事と余暇の間

題，ツーリズムにおける人間の労働のとらえ方の問題と関連している。

## 2. 本物・実物志向をめぐって

もともとツーリズムでは、人々（ツーリスト）は文化財等（観光資源）について本物・実物を見たり接したいとする欲求，すなわち本物・実物志向があるとされてきたが、1973年マッカンネルは、それは所詮「演出された本物・実物」（staged authenticity）の域を出るものではないと主張し、大きな波紋をよんだことがある（参考文献j,cf.ε）その場合マッカンネルでは、これは単に観光資源等が本物・実物か否かという問題ではなく、観光に関連する場所、例えばホテルやレストラン等において人々の働いている真の姿が見られるのはどこにおいてであるか、という問題として提起されているのである。

マッカンネルの言わんとするところは次の点にある。すなわち、今日ツーリストが経験し知ろうとしているのは、レストランやホテルでも準備作業の行われるバックスペース（いわゆる舞台裏）の人々の実際の作業（仕事）の姿であって、顧客用に装われたフロントスペース（表舞台）の姿ではない。実際の「本物・実物」である作業の姿を見聞することによって、現在社会の真の（本物・実物である）姿を知ることができる。

しかし、バックスペースでの作業の真の姿は、ツーリストには所詮把握できないものである。というのは、その作業では多かれ少なかれ専門的な技術が必要とするので、その真の姿はツーリストでは所詮把握できないからである。その意味ではツーリズムの経験・見聞は、所詮「演出された本物・実物」の域を出るものではない。だが、このことによってツーリストが真に知ろうとしているものがどのようなものであるかについて、見誤ってはならない。現代のツーリズムは、真の本物・実物志向を満たすものではないが故に、限界があるが、かといってその意義が否定されるものではない。

マッカンネルによると、このようにツーリストは作業・労働の真の姿に接しようとする。それは所詮「演出されたもの」ととどまるのであるが、このこと

によって作業者とツーリズムではそれ相当な別々の作用が生まれる。すなわち、ツーリストの見聞によって作業者では労働意欲が向上するかもしれないが、ツーリストの真の希望は満たされない。この点についてマッカネルは、「ツーリストの疎外が始まるところで、労働者の疎外はストップする」と述べている(k,p.6)。これは、ツーリストの犠牲で、労働者の意欲向上は可能と言っているように聞こえる。

これらの点をみると、マッカネルは、社会の基本は労働にあるとみているものと解される。労働のあり方を含めて社会のあり方をツーリズムは変えることができるというのが、その真意である。ツーリズム革命という言葉の当否は別にして、ツーリズムによりこうした面を含めて変革が可能とみているものと解される。アーリの「見る目」とは問題意識が異なると主張するゆえんである。

こうしたツーリズム振興論に対しては、世界全体的にみてツーリストの受け入れ能力には限界がある、特にマストツーリズムの進展により環境破壊等がおき、ツーリストの数を抑制する必要があるというツーリズム抑制論があるが、これに対してマッカネルは、どのように考えているか。かれによると、こうした抑制論は、ツーリストの行き先が特定個所に偏っているなどツーリズムにアンバランスがあるためにおきているものであり、そうしたアンバランスが是正されれば問題はないとし、世界を全体としてみればツーリスト受け入れ能力に上限があるというものではないと述べている(k,pp.167-168)。

以上の所説が先進国に限られたものであることを、マッカネルは2001年わざわざ断っている(l,pp.390)。そこでかれは、ツーリストの本物・実物志向はこれを他の者や事物(otherness)についての経験志向と考えるべきものに発展させるとともに、発展途上国はじめ世界の多くの所では現在でもツーリストでない人やツーリズムと無関係に生計を立てている人が実に多く存在している状況を前提にすると、現在のツーリズムについて、それをポストモダン論でいうような段階にあるとする者は、ツーリズムのことが何もわかっていない未熟者だけであると評している(l,pp.380,389)。



そこで、現代のツーリズム、直接的にはその理論を、モダン（時代）のものとみるかポストモダン（時代）のものとみるかについて論じた 2005 年のユリーリィ (Uriely,N.) の論考（参考文献 1）をレビューする。

#### IV. ポストモダン論的現代理論の特徴と位置づけ

##### 1. ポストモダン論的現代理論の特徴

ユリーリィが問題意識とするところは、ツーリストの基本的性格に関連して、後期産業社会（advanced industrialized society）を基盤に概ね 1960 年代ごろから現われてきた現代理論の特色を、いかにとらえ総括したらいいかという問題である。ここで現代理論とよぶものは、時期的に現代というよりも、内容的に現代的なもの、すなわち、それまでとは異なった問題意識、主張、理論内容をもつもので、しかもそれは、主張者本人により、あるいは関係論者により、一言でいえば、一般にポストモダンとよばれることの多いものをいう。これらの現代理論をポストモダン理論とよんでいいかどうかは後段で問題とするが、これらの現代理論の特徴は、ポストモダン論的観点に絡めて考察すると、ユリーリィによると、さしあたり次の 4 点で示されることができる。

第 1 点は、これまでの旧来理論が、人々の行動の性格等についてツーリズムにある場合と日常生活にある場合とでは別のものであり、従ってツーリストと非ツーリストとは区別できるものと考えてきたのに対して、現代理論がツーリストと非ツーリストとでは、従ってツーリズム上の行動と日常生活上の行動とでは、根本的相違がないと主張するところにある。

すなわち現代理論では、今やツーリストと非ツーリストとの区別は基本的にはなくなっている。人間はすべてツーリズム的生活を土台とするものとなっている。ツーリストは現にツーリズム過程にあるものであるが、非ツーリストはたまたまツーリズム過程にないだけのものであると規定されるのである。

ツーリズム上におけるこのような区別消滅（de-differentiation, deconstruction）の主張は、概ね 1990 年代におきたもので、例えば、1994 年ラッシュ (Lash,L.) / アー

りは、人は余暇・休暇にあるか、日常的な仕事のなかにあるかを問わず、基本的にはツーリズムのなかにあるものであり（人生はツーリズム）、これまでいわれてきたような意味での「ツーリズムは、終わった」（end of tourism）としている（i,p.259）。同じく1994年ムント（Munt,I.）は、今や「ツーリズムがすべてのものであり、すべてのものがツーリズム化している」と論じている（m,cited in t,p.204）。

このことは、仕事（労働）と余暇（ツーリズム）との区別、あるいは境界が、なくならないまでも、希薄になっていることを前提とする。つまり、旧来の区別は、何よりも仕事と余暇の間においてあったものであるが、それが消滅している。この点の論拠として、例えばライアン（Ryan,C.）らは、仕事の面でみると、人間の余暇活動に関連するスキーなどの講習が専門的職業となる一方、ソフトウェア開発部門などでは仕事時間と余暇時間との区別が薄くなっていることなどを指摘している。人間行動における仕事関連性（work-related）とツーリズム（余暇）志向性（tourism-oriented）との結合がおきているというのである（p,cited in t,p.204）。

以上の点を一般論的レベルでいうと、旧来理論が社会のあり方についてとにかく1つの出来上がった枠組みあるいはスキーム（a grand design）を前提にして、ツーリズムなど社会現象はその構図のなかで分析・観察が可能なものと考えてきたのに対して、現代理論は、今や、そのような出来上がった枠組みを特徴づけてきた、例えばツーリストと非ツーリストという区別は消滅していることを立脚点にしているのである。

こうした区別消滅について、アーリは、以上のような水平的領域間の区別消滅だけではなく、垂直的な区別消滅もおきていると指摘する（s,p.76）。例えば食生活や衣服等において上層階層と下層階層との区別消滅傾向をいうものである。さらにアーリは、美的観（aesthetic）でも旧来のような枠組み的区別が消滅傾向にあると主張している。これはアーリらの主張する再帰的近代化の一環として美的再帰化、つまり美的観の普遍化・共通化がおきていることをいうもので、例えば、音楽はこれまで、曲や演奏にそれぞれ独自のオーラがあり、非日常的な雰囲気や沈思して聴くべきものであったが、今やそうした特別なオーラ

は求められず、日常的な気晴らしの状態 (distraction) で聞くものとなっている (s,p.76)。

第2点は、旧来理論が少なくともツーリストの行動や性格についてツーリストの間で基本的差異がなく、同質的なものとして一般化できるもの (generalizing) として主張してきたのに対して、現代理論ではそうした同質化、一般化は不可能で、ツーリストのいかんにより異なるもの、多様化があるものであることを強調するところにある。こうしたツーリストの類型相違論はすでに 1970 年代ごろからプログ (Plog,S.) 等により指摘され論究されてきたが (t.p.205;cf.w,150-151 頁)、ユリーリィも、バックパッカーについての最近の調査によると、服装や乗り物等では同じ者でも、旅行で何を求めるかといった点で異なることがあり、服装などの外面的同様性と内面的 (精神的) 多様性の同居の状態を見誤ってはならないと述べている。これも換言すれば、ツーリストという一般的概念の崩壊の主張であるが、マスツーリズムでも特に個人客マスツーリズム (individual mass tourism) では重要な事柄である。

第3点は、旧来理論がツーリストの観賞・体験の対象物である観光資源の客体性を重視、時には絶対視してきたのに対して、現代理論では観光資源に対するツーリストの主体的関与 (subjective negotiation) を強調するところにある。これはもともとツーリストの見る観光資源の本物・実物性にかかわって論じられてきたもので、特に 1973 年マッカネルにより、前述のように、それは所詮「演出された本物・実物」の域を出るものではないことが指摘され、一躍論議的となったものである。

マッカネルらの所論は、ツーリストの求めるものが本来真の本物・実物であることを主張するものである点では、「客体的な (objective) 本物・実物論」といわれるが、マッカネル以後、ツーリストの見るものは「(ツーリズム事業関係者により) 作り上げられた (constructive) 本物・実物」とする主張が現れた。これはツーリストの観賞対象物が人間 (ツーリズム事業関係者等) により加工・構成されるという考えを本格的に展開したものであったが、それをさらに進める

形でワング (Wang,N.) により、観光資源の意義はツーリストがそれに主体的にどのように関与するかのかんにより決まるとする説 (existential authenticity) が唱えられている (u,p.49)。

第4点は、旧来理論が全体としてみるとそれぞれの考え方においてなんらかの程度で絶対性を主張し、他の考え方を許与することが少なく、従って考え方同士で妥当性をめぐって論争がある場合が多かったのに対して、現代理論ではそれぞれの考え方を相対的なものとして位置づけ、考え方の中で相互に協調する傾向が強いことである。例えば、旧来理論ではツーリストの見るものが虚偽または演出されたものであるが故に、ツーリズムは社会的に無意義なものとするブルスチン (Boorstin,D.) らの見解 (参照文献c) と、そうであってもツーリズムは有用とするマッカネルらの見解との間でかなり険しい対立があったが、ユリーリィによると、現代理論ではそうした険しい対立はあまりない。

現代理論でも、観光目的物のハイパーリアリズム形成に志向するシミュレーションの考え方と、自然や農村等の本物・実物に志向した「他のもの」(the other) 的考え方があり、旧来理論における前記ブルスチンの考え方とマッカネルの考え方とを引き継いだ形になっているが、現代理論では両者は対立・対抗という関係ではなく、相互に補足し合う関係にあるものとされている。

ポストモダン的とされる新しい考え方、現代理論の基本的特徴は大要以上であるが、これに対して、ユリーリィは次のように評価し位置づけを行っている (t,pp.202,211ff)。

## 2. 現代理論の位置づけ

第1に、現時点でみた場合、旧来理論と現代理論とは明確に区別されうるというものではなく、旧来理論が現代理論によって全く置き換えられたというものでもない。

それ故第2に、これらの現代理論はポストモダン理論の影響下にあるものであるが、結論的にいうと、それらは旧来理論に代わるものというよりは、それ

に対する追加的・補足的なものであって、ポストモダン理論というよりは、後期モダン理論（late modernist）というべきものである。

ユリーリィのみとところ、現代理論は概ね以上のような位置づけにとどまるもので、ポストモダン理論とはいえないものである。それどころか、さらに現代理論は、ツーリズム理論の今後の発展にとっていくつかの難点をもつものであり、手放しで歓迎できるものではない。

第1に、旧来理論が志向していたツーリスト活動と日常生活活動との区別、そのうえにたつツーリズムの全般的包括的理論の構築は、ツーリズム現象に本来あるところの、日常生活との本質（essence）の違いを究明せんとしてきたもので、ツーリズム理論の発展にとって実に有意義なものであるが、これに反して、現代理論の区別消滅論はこうした理論的視点がないものであり、今後における理論研究の前進にとって必ずしもプラスになるものではない（tp.211）。

第2に、現代理論のいうツーリストの主体性関与の主張についてみると、少なくとも次の点で難点がある。まず、ツーリズムでは観光資源はじめ物的条件が大きな要素を占めるが、現代理論ではそうしたツーリズムの客体的制約条件が過小評価される危険がある。このことは他方において、ツーリストが極めて自由な存在であるかのような幻想を醸成し、現実にはツーリストがもつ、例えば所得の違いなどによる制約条件が軽視ないし無視される傾向を助長する。

第3に、現代理論の論者で多く見られる協調性、論争回避性も、学問・理論の発展という見地からすると、必ずしも望ましいものではない。現に一部論者からは「ポストモダン理論では何でもあり」（tp.212）と揶揄されている。

旧来理論とポストモダン論的現代理論についてのユリーリィの所論の大要は以上であるが、ツーリズムについての以上のような最近の論調のなか、シャープレイ（Sharpley,R.）により次のような主張が提起されている。それは、現在一般に強く主張されている持続可能ツーリズムに対して批判的なもので、それを越える（beyond）枠組みが必要であり、それは現代ツーリズムの原点にたち帰ること、すなわち、ツーリズム業は自然資本や人的資本など各種の資本を用い

て事業を行う典型的な資本主義事業 (capitalist endeavour) であることを根本に据えることによって可能になるというものである。次にこれを管見する。

## V. 「ツーリズム＝資本主義事業」論

### 1. 問題の提起

シャープレイの出発点になっているのは、ツーリズムは何よりも経済的事業であり、マスツーリズムを含めてツーリズムは、経済的發展に貢献する機能がある。このことを正しくとらえ、適切な理論を展開することが肝要である、ということである。

まず、マスツーリズムについてであるが、それに対しては、持続可能な発展の見地からも、今日では多くの論者が否定的見解をとっているものである。これに対してシャープレイは、すでに2006年「マスツーリズムの擁護」(In Defense of (Mass) tourism) という論考 (cited in q,p.147) を発表し、2009年の著 (参考文献 q) においても、旧来的マスツーリズムは、経済的發展にとっては、持続可能なツーリズムなどよりも効果的な手段でありうると述べている (q,p.147)。

シャープレイはそれ故、近世の歴史においてツーリズムが果たしてきた役割について積極の見地をとるのであるが、それが何よりも資本主義の発展のなかで行われてきたものであることを強調する。今日までツーリズムがこれほど発展してきたのは、ひとえにビジネスとしての資本主義的事業のもとで行われてきたためであるとして、「ツーリズムの発展は、往々にして、1つの社会的現象としてのみ、すなわち、人々には平和的に世界中を旅行したいとする欲求があり、それが発揮されたためであるなどと説明されることがあるが、こうした見方には、ツーリズムの発展が本質的には資本主義的現象であることが看過されている」と述べている (q,p.148)。

従って、国連提唱の持続可能な発展、とりわけそれをツーリズムに適用した持続可能なツーリズム論に対してかなり批判的である。持続可能なツーリズム論は、直接的には1990年3月バンクーバーで開催された“グローブ90”会議

を契機に強調されるものとなったが、この方向に対して、シャープレイは持続可能なツーリズムの概念についてコンセンサスが得られた定義も規定もないとし、実務界でもイギリスの場合持続可能なツーリズムの原則が実践されている証拠はないと論じている (q,pp.xiv,175)。そのうえにたって「持続可能なツーリズムの原則が規範的に適用されるならば、ツーリズム発展にとっては阻害要因となることがある」とさえ述べている (q,p.149)。

ただし、持続可能な発展の必要性を否定するのではない。言われているような持続可能なツーリズムの命題は、偽善的欺瞞的な (hypocritical and delusional) ものであるから、それを越える、もっと活発な議論ができるような実践的アプローチが必要というのである (q,p.176)。

では、ツーリズム (業) はどのようなものと規定されるのか。それは、一言でいえば、次の6種の資本を投下して経済的利得 (端的には利潤) をあげるよう運動を行うものである (q,pp.159-160)。

- ①社会的文化的資本 (socio-cultural capital) : 文化的事物や社会的行事などをいい、一般的な人間関係である社会関係資本 (social capital) が土台をなすという位置づけのものである。
- ②人的資本 (human capital) : 人間個人が有している技能や熟練などである。
- ③環境資本 (environmental capital) : 自然環境、風物等で、通常は自然資本 (natural capital) といわれるものであるが、関連した建造物 (built environments) も含まれる。
- ④財務資本 (financial capital) : 資金等の財務手段である。
- ⑤政治資本 (political capital) : 社会関係資本のうち政治関連のものを特に指すもので、地域内部のコントロール力や地域外部との交渉力などが焦点になる。
- ⑥技術資本 (technological capital) : 通常はインフラや固定資産など人工物資本 (manufactured capital) といわれるものであるが、情報・通信技術の重要性を示すため、この用語が用いられている。

ツーリズム (業) は、これら6種の資本を統合的に運用してゆく事業であり、



観光地は端的にはこれら資本の結集体、すなわち観光地資本 (tourism destination capitals) と定義され、その運営・事業は資本主義そのものと規定される。この場合、資本主義はマルクス、ウェーバー、ドップらにより用いられてきた意味のそれで、資本主義の根本的特徴は、企業家精神に代表される資本主義的精神と、資本主義特有の経済システムに求められるとともに、次の3者を基本的メルクマールとするものと規定されている。①私有財産制 (the private ownership)。②利潤追求 (the pursuit of profit)。③市場メカニズム (markets and market prices)。

資本主義の確立期とされるのは、イギリスの場合、19世紀後半で、この時期にはトーマス・クックにより現代的な集团的ツーリズムが始められている。資本主義の確立と集团的ツーリズムの生成とが時期的に照応しているのは、もとより偶然ではない。資本主義的活動の進展による鉄道や宿泊施設等の整備などとともに、働く人の所得向上や自由時間増加などを含んだ「資本主義的な社会・経済システムの勃興」がそれを可能にした、とシャープレイは表現している。資本主義たるところに視点が置かれているのである。

## 2. 観光地資本理論の若干問題

観光地は、前記のように、6種の資本の結集体とみなされるが、観光地は、ほとんどすべての場合、複数の経営体や経済単位から成るものであり、少なくともその意思決定には合意を必要とする。この点は、地域(観光地)のコラボレーション体制の問題として、これまで実践上でも理論上でも取り組みが盛んに行われてきたものであるが(参照文献z~r)、シャープレイは、結局それは、政治資本の働きによって解決されるものとし、ブラックプールについての実態調査等によると、地方公共体のリードによってなし得られるものとしている。

ただし、観光地資本の運動では、根本的目的はあくまでも地域振興、地域関係者の経済的隆盛にあって、ツーリズム(の振興)は、目的に対する手段にすぎないことが強調されている。例えば、地域振興のためには、観光業以外の産業・企業の誘致などの手段もある。いずれにしろ、観光地は多種多様多元的な



ものであるから、それぞれの観光地の条件に応じた適切な戦略・行動が必要である、という。

結論として、シャープレイは、資本主義社会ではツーリズム事業は、観光地を含めて、他の経済分野のそれと基本的に変わるところがない。地域振興のうえでも環境保護のうえでも特別扱いされる必要はない。それ故、持続可能な発展でも特別扱いされる必要はない、と述べている (q.p.198)。かれの言わんとするところはこれに尽きる。

以上のようなシャープレイの見解は、人的資本や政治資本（社会関係資本）をも含めて観光地の資本とし、観光地をこうした資本の運動として規定するところに何よりも特色があり、観光地を1つの資本運動とみる新地平を開いた卓見というべきものである。これをさらに展開すれば、観光地を含めた観光産（企業）を資本運動として、価値増殖過程の分析だけではなく、社会的有用物の生産過程、労働過程の分析も可能になると考えられる。こうした観点による論究によって観光業（資本）の他の産業とは異なる（使用価値上の）特色が浮かび上がるであろう (cf. 参考文献 r)。

ただし、シャープレイは国連規定に立脚する持続可能なツーリズム論には批判的であるが、観光産（企業）の資本主義的なあり方に批判的であるのではない。これに対してマルクス主義的な資本主義論は、資本主義批判を含んだもの、あるいはそれを絶対的内容とするものであるが、シャープレイはこうした批判的見地にたつものではない。資本主義社会のツーリズム（業）である限り、資本主義の把握においてマルクスの見地を排除する必要はない、というのがシャープレイの考え方である。

それ故、シャープレイでは、（観光地）資本は利潤追求を至上命令とするから、観光をあおり、その結果資源の浪費などを招くという問題点の指摘はあるが (q.p.154)、利潤の源泉が剰余価値にあるといった観点は示されていない。利潤は（各種）資本の当然のフローという見解である。

## VI. 小括—資本主義体制とのかかわりの問題について

観光・ツーリズムがそもそもどのようなものかについて、本稿で取り上げたものでは、大別して2つの流れがある。1つはモダン・ポストモダンの枠組みで論じるものであり、今1つはなんらかの形や程度において資本主義とのかかわりで論じるものである。

前者のモダン・ポストモダンの枠組みについてみると、特にポストモダンの理論には時代の流れを先見する諸点がみられ、聞くべきところが極めて大であるが、それらは必ずしも一般に認められる共通的な認識とはなっていない。これは、一つには、資本主義体制という日常でも感じられる枠組みからかけ離れたところで論じられているため、現実離れしたものと感じられている側面があると思われる。

ポストモダンの論者のなかでも、アーリの所論は組織された資本主義から組織揺らぎの資本主義への移行が主張の背景にあり、資本主義という視点が全くないのではないが、ツーリズムそのものの視点、およびモダン・ポストモダンの視点が支柱となっていることは否定しがたい。

これに対して、シャープレイの所論は、資本概念が極めて広いことを絶対的特色としつつも、オーソドックスな資本主義論を前提にして、ツーリズム企業も観光地もそうした資本運動の1つとして、他の産業・資本と異なるところがないことを指摘したものである。しかしそれは、資本主義体制批判の見地にたつものではなく、それ故「資本主義体制下でのツーリズムの本質」という分析視点にはなっていない。しかし、現代ツーリズムについて資本主義批判という見地から資本主義体制とのかかわりで論じたものが、これまでにないものではない。

そうした試みの古典的な代表例として、1958年ドイツのエンツェンスベルガー（Enzensberger, H.M.）が発表した論考（参考文献 d）がある。これはその後、1993年刊行のハーン（Hahn, H.）/ カーゲルマン（Kagelmann, H.J.）の編著（参考文献

献<sup>9)</sup>においてドイツ（語圏）ツーリズム研究に最も大きな影響を与えたものとして収録されているものである。この論考については別稿（参考文献<sup>y)</sup>でレビューしているので、詳しくはそれを見ていただきたい。エンツェンスベルガーの結論的主張だけをここに収録しておく。

エンツェンスベルガーによれば、現代のツーリズム、少なくとも大衆ツーリズムは、大衆が日常生活からの逃避（Flucht）を図らんとするものであるが、しかしそれは結局不可能で、逆にツーリズム企業によるツーリズム事業の対象という形で、自由時間についても日常生活についても資本主義体制に包摂されたものになる。要するに、資本主義のもとにおいて人々は資本の支配からの脱却を試みるが、それは所詮不可能で、改めて資本の支配のもとにおかれるという資本主義社会全般にみられる矛盾が、ツーリズムでも貫徹するというのである。

ドイツでは、これ以外に1978年ツーリズム企業の本質を資本主義経済体制から批判的に論じたアルマンスキ（Armanski, G.）の所論（参考文献<sup>a)</sup>）がある。これについても前記別稿で論じている。同じく結論のみを収録しておく。

アルマンスキによれば、ツーリズムは資本主義社会では商品の生産と交換という性格をもち、基本的には、資本活動として行われる交通業等と変わらない。ツーリズム業務は商品として生産され販売されるが故に、通常の資本主義経済の諸条件に下属したものとなる。つまり、ツーリズム業は利潤追求のために資本投下がなされるものであって、ツーリズム業は資本にとって投下領域の拡大を意味する。そこで行われるサービス労働は資本のための賃労働であり、ツーリズムははじめサービス業ではそうした人間労働その物が直接商品として売買される。従って例えば、観光商品の使用価値は交換価値の担い手である限り有用性をもつ。サービス業などの利潤の根源は剰余価値の獲得、労働者の搾取にある。

こうした試みには時代を超えて聞くべきところがあり、資本主義体制という枠組みでツーリズムの本質を明らかにした意義は、高く評価されるべきものである。しかし反面、こうした見解にみられるところの、サービス行為＝空費と

してこれを貶置する傾向は修正されるべきものと考ええる。

これは根本的には価値概念が狭いところに、そして経済過程の分析が實際上価値（増殖）過程の分析にとどまり、経済主義の性格を強くもつものであるところに起因がある。製造業を中心にした産業資本主義時代には物品としての商品の生産が社会発展の決定的要因であったから、物品の生産過程以外の活動（労働）はこれを空費とすることに根拠があった。1940年クラークが提起し、現在でも人口に広く膾炙している、産業を第1次産業、第2次産業、第3次産業のみに分類するものも、サービス産業を軽視したもので、時代遅れのものといってい。今日では妥当性を有しない。

現在では、商品の流通過程やサービス業務等を含めた価値概念が不可欠である。そうした価値概念でないと社会的有効性をもたない。このことは東欧社会主義体制の崩壊が歴史的に証明している。ツーリズムについていえば、すでに別稿で論じたように（参考文献d）、ツーリズムによって（交換）価値が生まれる。それまで無価値であったものに価値が生まれるという観点が基礎におかれるべきであるし、ツーリズムの今日の意義については、さらに、資本運動においても有用物の生産過程、すなわち労働過程の論究を考慮に入れたような分析が必要であると思料する。

#### [参考文献]

- a : Armanski, G., *Die kostbarsten Tage des Jahres: Massentourismus — Ursachen, Formen, Folgen*, 1978, zitiert aus, Prahl, H./Steinecke, A. (Hrsg.), *Tourismus*, Stuttgart, Philipp Reclam jun, 1981, SS.89–92.
- b : Bahar, O./Kozak, M., *Tourism Economics: Concepts and Practices*, New York: Nova Science Publishers, 2008.
- c : Boorstin, D., *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*, New York: Harper, 1964.
- d : Enzensberger, H. M., *Vergebliche Brandung der Ferne: Eine Theorie des Tourismus*, *Merkur*, 1958, 12. Jg., SS.701–720.
- e : Goeldner, C. R./Ritchie, J. R. B., *Tourism: Principles, Practices, Philosophies*, Hoboken: John Wiley & Sons, 10th ed., 2006.

- f : Hahn, H./Kagelmann, H. J. (Hrsg.), *Tourismuspsychologie und Tourismussoziologie*, München: Quintessenz, 1993.
- g : Hunziker, W., *Fremdenverkehr, Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*, 4.Bd., Stuttgart: Gustav Fischer, 1965, SS.152–154.
- h : Leiper, N., Tourist, in: Jafari, J. (ed.), *Encyclopedia of Tourism*, London: Routledge, 2000, pp.589–591.
- i : Lash, S./Urry, J., *Economies of Signs and Space*, London: Sage, 1994 (reprint 2002).
- j : MacCannell, D., Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings, *American Journal of Sociology*, 1973, Vol.79, pp.589–603.
- k : MacCannell, D., *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, Berkeley, University of California Press, 3rd ed., 1999.
- l : MacCannell, D., Remarks on the Commodification of Cultures, in: Smith, V.L./Brent, M., *Hosts and Guests Revisited: Tourism Issues of 21st Century*, Elmsford: Cognizant Communication, 2001, pp.380–390.
- m : Munt, I., The Other Postmodern Tourism : Culture, Travel and the New Middle Class, *Theory, Culture and Society*, 1994, Vol.11, pp.101–123.
- n : Opaschowski, H. W., Tour — Tourist — Tourismus, in: Prah/Steinecke (Hrsg.), *Tourismus*, 1981, SS.10–13.
- o : Poser, H., Geographische Studien über den Fremdenverkehr im Riesengebirge — ein Beitrag zur geographischen Betrachtung des Fremdenverkehrs, *Abhandlungen der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*, Mathem.-Physikal. Klasse, III . Fol., H.20, 1939; zitiert aus, Hofmeister, B./Steinecke, A. (Hrsg.), *Geographie des Freizeit- und Fremdenverkehrs*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1984, SS.36–41.
- p : Ryan, C., Stages, Gazes and Constructions of Tourism, in: Ryan, C. (ed.), *The Tourist Experience*, London: Continuum, 2002, pp.1–26.
- q : Sharpley, R., *Tourism Development and the Environment: Beyond Sustainability?* London: Earthscan, 2009.
- r : Throsby, D., *Economics and Tourism*, Cambridge University Press, 2001.
- s : Urry, J., *The Tourist Gaze*, London: Sage, 2nd ed., 2002 (reprint 2009).
- t : Uriely, N., The Tourist Experience: Conceptual Developments, *Annals of Tourism Research*, 2005, Vol.32, pp.199–216.
- u : Wang, N., *Tourism and Modernity: A Sociological Analysis*, Oxford: Pergamon, 2000.
- v : 大橋昭一「組織された資本主義から組織揺らぎの資本主義へ—再帰的近代化の経営学への一過程— (1) (2)」『関西大学・商学論集』1999年第44巻第5号51–69ページ, 2000年第44巻第6号1–20ページ
- w : 大橋昭一 / 渡辺朗『サービスと観光の経営学』同文館, 2001年

- x: 大橋昭一「ドイツ語圏における観光概念の形成過程—ドイツ観光学研究の1章—」『大阪明浄大学紀要』第1号, 2001年, 11-21ページ
- y: 大橋昭一「第二次世界大戦後ドイツ語圏における観光概念の展開過程—観光事業経営のための特徴的諸論点を中心に—」『大阪明浄大学紀要』第2号, 2002年, 17-30ページ
- z: 大橋昭一「集合戦略からコラボレーション戦略へ—観光地の戦略主体論の構築にむけて—」『和歌山大学・経済理論』第348号, 2009年3月, 1-29ページ
- $\alpha$ : 大橋昭一「コラボレーション—一般理論とコラボレーション優位—観光経営理論の基礎概念の研究—」『関西大学・商学論集』第53巻第6号, 2009年2月, 63-82ページ
- $\beta$ : 大橋昭一「コミュニティ基盤観光経営理論の諸類型—観光地コラボレーション理論の形成—」『和歌山大学・観光学』第1号, 2009年4月, 1-13ページ
- $\gamma$ : 大橋昭一「観光地コラボレーション理論の展開—コミュニティ基盤観光経営理論の発展—」『和歌山大学経済学会・研究年報』第13号, 2009年7月, 31-61ページ
- $\delta$ : 大橋昭一「周辺地観光・農村観光・都市観光についての理論動向—観光の価値創造性の観点からの考察—」『関西大学・商学論集』第54巻第3号, 2009年8月, 15-34ページ
- $\varepsilon$ : 大橋昭一「観光分野における文化の意義をめぐる諸論調—文化的ツーリズムの特性についての考察—」『大阪観光大学紀要』第10号, 2010年2月, 投稿中